

新刊批判

ブサン氏佛譯俱舍論について

翻譯者はベルギー人にて Grand 大學の教授 Louis de la Vallée Poussin 氏である。氏は梵語、西藏語の造詣深く特に西藏語は現今歐洲に於ける東方研究者中の權威と謂はれ既に『二十唯識』を西藏文より佛譯し又『佛教』(Bouddhisme, 1898) 等數種の著書もありて熱心なる佛教研究者である。最近、氏は西藏文俱舍論を佛蘭西語に翻譯して第一卷を一九一三年、第三卷を一九二四年に之を世に公にした。第二卷は Vasubandhu et yaqontina (cosmologie) に云ふ標題を附して、ブラッセル及びロンドンより一九一九年世に現はれ、既に識者の熟知してゐる所であるから茲には改めて述べない。

今紹介せんとする第一卷及第三卷は東方研究白耳義協會 (Société belge d'études orientales) から發行され、標題は L'Abhidhammakosa de Vasubandhu であつて、巴里の Paul Geuthner 書店より出てをる。第一卷は二章から成る。第一章は界品 (Les Dhiāus, 第二章が根品 (Les Indriyas) である。第三卷は始、譯者の豫定では第四・第五の二章を容れる筈であつたのが、原稿が Louvain

一七〇 一四〇

で焼失したので、今は第四章業品 (Le Kamma) 丈となつて現はれてをる。譯者ブサン氏は第一卷の序に佛譯俱舍論は四冊として發行の計畫であること述べてゐるが今日までに既に三冊世に現はれ、然も其でやつて業品まであるから、尙隨眠品等四品も残つてゐる所へ、譯者の豫定してゐる如く破我品 (Le Pudgalin) ブサンは之を俱舍論の補に關する論文をも加へて一卷とするやうにならば極めて膨大なるものなる譯である。

序に紹介して置くがブサン氏は以上の佛譯俱舍論の外に、阿毘達磨文學に關する註解、俱舍教義の組織的説明 (說一切有部、毘婆沙、經量部の教義)、偈頌の修正原文、種々の引文、追加並に索引等を含む『綱要』一卷を發刊して其翻譯の業を完成する希望だご告げてゐる。

次に譯者ブサン教授が、この俱舍論翻譯に際して、使用參考せし書物を譯者の言葉に依つて述べて置かう。一、S. Lévi 並に Steinhilsky 兩氏が佛教文庫 (Bibliotheca Buddhica) 中に出版せられたる釋論 (Vākyā) 第一章。

二、長行 (Bhāṣya) の西藏譯。其中、第一章は Stokerbatsky 出版の佛教文庫本に依り、第二章はギメー博物館 (Musée Guimet) の丹珠爾本による。

三、眞諦譯（東京縮刷藏經）

四、玄奘譯。一八八八年京都法藏館より出版の、佐伯旭雅師の三十卷本（十冊）。此旭雅本は阿毘達磨の支那語の注解を余に爲し呉れし余の親友、宇井伯壽氏の寄贈にかゝるものゝ譯者は表白感謝してゐる。譯者も謂つてゐるし、世の學者も、よく承知してゐる如く、旭雅本は阿含、毘婆沙論其他俱舍に關する支那の諸注の引文、極めて多いのであるがブサン氏は本譯書中には等多くの引文を脚註の中に引用してゐる（氏の脚註は研究上非常に参考になるものだと思ひてゐる）。其の引文中、品類足論（*Pakaraṇa*、界身足論（*Diśāṇīya*）阿毘曇心論（*Abhidhammāṇāya*）等は東京縮刷藏經を参照し得たが、阿含、婆沙論等大部分の引文に對しては旭雅本の依用してゐる通り黃蘗本に依り丁附等を附したミ述べてゐる。因に第二卷目の、かなり長い序文中に、終始一貫して玄奘譯を讀んでくれたのは Louis Van Hie 氏だミ告白してゐる。

今第一、及第三兩卷の體裁を見るに、譯者の親切が一見眼に、映するのである。即ち上欄左側偶數頁には、第何章第何偈云ふことを明示してゐる。例へば第一卷第二頁に *Chapter premier, 1-2a* とあるは、該頁は第一章第一偈及び第二偈第一行に相當してゐる事を示す

ものである。又右側奇數頁の上欄には旭雅本の卷數（冊數に非ず）ミ頁（左右を *b* *a* にて示す）ミを記してゐる。例へば第一卷第三頁に *Himastang, i, fol. 1b-3a* とあるは玄奘譯（旭雅本）第一卷第一頁左より第二頁右に相當する事を示してゐるものである。又各頁の節の改まる所なきに、濃く太い數字にて、已下は第何偈なるかを指示し、本文中に、數字を括弧に挟んで (11) (2a) 等とあるは其處より已下は旭雅本の一頁左、若くは二頁右になる事を示すものである。かくの如き親切なる譯者の記入に依り我々は本譯書ミ旭雅本ミを對照する場合、非常なる便益を得る譯である。尙下方には本文より一段ミ小さな活字を以て譯者の詳細忠實なる脚註を設けて、研究者に有益な參考を提供してゐる。殊にかなり多數の梵文等を挿入してゐる事は一層斯界の研究に資する處多大なるを信す。

譯者ブサン教授は第一卷の短かき序を終るに當つて『ガン大學の寄金は概ね本書の出版費に充當されてゐる。今後ミも益、予に其同情を繼續されん事を望む』ミ述べてゐる。思ふにかゝる特種な専門的な文献を出版することは、極めて難中の難事ミは譯者の日頃痛感してゐた所なるに拘らず、大學の莫大なる同情、譯者の燃ゆるが如き熱心ミ不斷の努力ミは、よく譯者の所

願の一端を成就せしめたのである。即ち譯者は所願成就の感激の中に、最早過去の勞苦をも打忘れ、愈宿願の成滿せん事の望を抱いて、其の希求を表白されたるものと信じ、氏と共に、此の事業の完成の日を持つものである。

一日、西藏語教授寺本氏を煩はして、大谷大學圖書庫三階に於て、第一章品第一偈及其長行に就き、大谷大學所藏の西藏文ミブサン氏佛譯ミの對照を試みたる結果、西藏文にある『諸ミ謂うは諸佛世尊の力を謂ふなり』(玄奘譯にては、諸言所表謂佛世尊ミあり)の文は佛譯には洩れて無く、西藏文にて『是亦、諸佛世尊の幫助を得て云々』とある諸佛世尊の語が複數なるに、佛譯にては *Le Bouddha Bhagavat* 之を單數ミしてゐる。又翻譯の際、文勢の爲か文句が兩譯多少先後してゐる所あることを認めたことである。然し其他廣く對照するの時間を得なかつたから、全班に通じては批評の限りでない。此點は斯界の學者の研究を待つものである。

泰西に於て、かの法華經の佛譯を以て有名なる天才、*Bernout* (1801—1833) によつて、一度阿毘達磨俱舍論の重要な事が紹介されて以來、歐洲の學者は、何れも常に深き注意を之に拂つてゐたのであるが、然も何人

も今日まで其研究に着手し得なかつた云うに就ては理由があるのである。抑現今、俱舍論は、偈頌 (*Kārikā*) と長行 (*Bhāṣya*) 共に、最早梵語ミしては存在してはゐない。僅か稱友 (*Yoginīra*) の俱舍釋論 (*Abhidharma-kosa vyākhyā*) のみが梵本ミして、寫本のまゝで傳はつてゐるのであるが、この釋論のみにては到底、俱舍論の研究は爲し得ないのである。俱舍論の偈頌、長行共に全部現存するものは漢譯及西藏譯のみである。故に俱舍論研究には梵語の知識のみでは極めて不充分であつてさうしても、之に西藏語及び漢文の知識が加はらねばならないのである。茲に已前より泰西に於て多數の研究者の注意を喚起しながら今日まで、何人も其研究に着手しなかつた所以があるのである。然し *Denison Ross* や *J. J. J. 氏* 等の俱舍論研究者が漸次現はれ、次で我がブサン教授が出で、偈頌ミ長行ミを西藏文より佛譯を試みることになり、ミにかく、既に業品までの佛譯は世に現はるゝ事になつたのである。今後泰西の研究者も、之に依つて自由に、我が俱舍論の研究に手を染め得るに至つた譯で、我が佛教學界の爲め、大に慶賀すべき事であると思ふ。最後にブサン教授の言葉を述べて擱筆せよう。

實に俱舍論は協力の爲に、又諸の學者 (*scholars*) を結

び附くる綱を更に緊縮する爲に生れたるものである。

Propter Convivia nata. —一九三四、一〇—(大谷)

友松圓諦氏 著 佛陀の言葉について

本書は「佛教の根本聖典」としての法句經の巴利原本よりの新譯であるが、法句經は既に各國語に翻譯せられてゐて、我國にあつても既に邦語譯として常盤大定氏の『南北對照英漢和譯法句經』の刊行を見、荻原雲來氏亦嘗て『宗教界』誌上に巴利原本よりの譯をものせられ、國譯大藏經第十二卷に立花俊道氏の翻譯を見るのであるが、『これらの諸譯の原意を傳ふるを先とし、文を潤飾せざるを目的とし、一般に稍難解であること、から、一般に了解せられ易きこと、同時に原本の意義を逸せざらんこと』を目的として『現代語に意譯せられたものである、法句經はもと韻文より成るものであるが、譯者はこれを散文口語に、譯出してその譯語に、まゝ、意譯に失するものもあるが譯文平易によく前諸譯の短を補ふものといふべきである。一般に經典といへば從來の漢譯によつたことから、一般の人々には經典は難解にして容易に味ひ難きものとせられて來たのであるが、これは一般専門學徒の間にあつても、漢譯の三藏を有するも未だ原典よりの直接邦語譯の經論、殊

に現代にある限りは、經典そのものゝ現代語に譯出せられて然る可きであるが、未だそれらの譯出のなきことは遺憾の極である。かゝる意味に於て本書の新譯の如きは難解とせられる經典そのものを一般化せしめる上に於ても更に一譯として加ふべきものである。元來佛教特有の語を現代語に意譯するといふことは随分難しいことであるが、本書に於てもその *nibbana* (涅槃) を『精神的自由』(12頁)、*bhikkhu* (比丘) を『修行者』(16頁)、*dāna* (施) を『慈善的施與』(85頁)、*Tathāgata* (如來) を『眞理に到達した人』(114頁) と本文中に強ひて意譯するよりも、これらの特有の語は可成り一般化せられてゐる語であるから、そのまゝに残し、或は涅槃、布施、ミルビを附して、註釋に於てその意を明にする方が其意を傳へるものではないかと思はれる。

譯者は更に註釋を附し、その註釋に於て、まゝ、譯者の感想をも附加するのであるが、『佛陀の言葉』は讀者は心靜かにその一句一句を味ふべきものであるから、譯者のこもするこ何等かの意義を附せようとする教訓めいた指令的言葉や、強ひるやうな譯者の感懷はなくともがなと思はれる。これは本書の口語意譯そのもので充分その意が盡されてゐるからである、こもあれ『佛陀の言葉』と題しての本書の原本よりの譯出の如きは

經典の一般化の上に慶ぶべきことであり、これを江湖に薦める、(四六判、洋装、價壹圓八拾錢。東京市赤坂區青山南町甲子社書房發行)。(林)

正 一三三頁十四行但以下ハ一三三頁六行ハ
誤 續ケヨ

大正十三年末佛教研究會

決算報告

大正十三年十二月三十一日佛教研究會々計

收入之部

一金貳千壹百拾貳圓五拾八錢也

內 譯

一金拾圓拾四錢也

一金壹千六拾六圓五十錢也

一金壹千圓也

一金貳拾七圓也

一金八圓九拾四錢也

支出之部

前年度ヨリ繰越金

本年中會費收入

學校ヨリ補助金

書肆賣上誌代

振替利子

一金貳千壹百拾貳圓五拾八錢也

內 譯

一金七百九拾圓四拾四錢也

一金九百七拾八圓參錢也 本年度分發行印刷代二回分

一金六拾貳圓也

一金拾八圓六錢也

一金七拾四圓也

一金參拾壹圓四拾錢也

一金六圓也

一金壹百四拾九圓五拾錢也 庶務手當及委員慰勞會費

一金參圓拾五錢也

以上

發送費 三回分 諸料 金

編輯謝禮及講演謝禮

諸用紙代

切手、ハガキ代

翌年度へ繰越